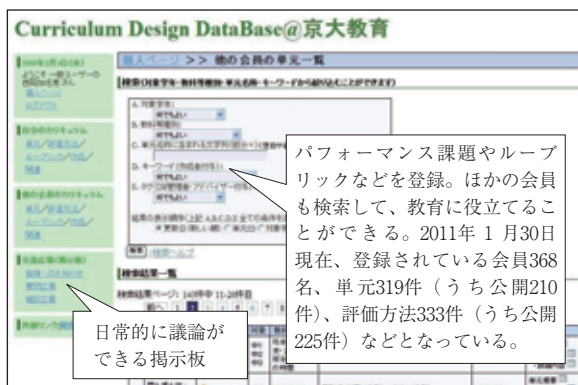


全国スクールリーダー育成研修

はじめに

現在の日本においては、学校や地域の教育改革を推進するスクールリーダー（教育委員会指導主事、学校管理職・研究主任、地域の教育サークルのリーダーなど）の育成・力量向上が急務となっている。

そこで、京都大学大学院教育学研究科では、2006年度、全国の希望者に研修を提供するE. FORUM（教育研究開発フォーラム）を設立した。E. FORUMでは、毎年「全国スクールリーダー育成研修」を実施するとともに、全国の教師たちの知見を共有・蓄積するシステムとして「カリキュラム設計データベース（CDDDB）」を開設している（図1）。詳細については、ホームページをご覧ください（URL： <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/>）。



▶図1. CDDDBの検索ページ

以下、2010年度の研修の様子について、アンケートに寄せられた受講者の声（声と示す）とともに報告する。なお、講師の所属については、特に明記していない場合は、京都大学大学院教育学研究科である。

1. 「スクールリーダー育成のための基礎講座」

「スクールリーダー育成のための基礎講座」（以下、「基礎講座」）は、基礎的内容についての共通理解を図るための研修である。

2010年度は、8月18日から20日の3日間実施し、東は栃木県から西は長崎県まで1都2府10県から、66名の参加があった。以下、その内容について紹介する（19日の内容については、次項を参照されたい）。

●ワークショップ「学校で活かすアサーティブ・コミュニケーション」 担当：大山泰宏准教授

声：「現在、学校現場で先生方は様々な対象者との人間関係に苦労している実態がありますが、本ワークショップではアサーティブな視点からの働きかけについて、楽しく学ぶことができました。子ども、保護者、他の職員等あらゆる対象について活

用できると思います。互いにやる気を持って接していく上でもとても大切なことだと思います。」

●講義「大学のアドミSSIONと高校のアクレディテーション」 担当：金子勉准教授

声：「学校評価の意味について考えることができました。小学校における学校評価は、『学力』ということの意味を十分に伝えずに行ったり、その目的を示さずに行ったりすることが多く、かえって『お客さん化』を生んでしまうと考えていましたが、愛する子どもたちのために、学校をより良いものにしていこうという方向で行うものであると感じました。」



●講義「こころの発達とその進化的基盤」 担当：明和政子准教授

声：「特別支援教育に対する国の姿勢や教育的な課題にふれながら、人間そのもののとらえ方を『誕生』の前後や発達の側面をわかりやすくお話いただきました。……あらためて人間のすばらしさに気付きました。今後、学校の中で、目の前の子どもたちを一層大切に育てられるのではないかと思います。深い研究に裏付けられた内容だけに感銘を受けました。」



●ワークショップ「カリキュラム設計：パフォーマンス課題の作成と活用」 担当：西岡加名恵准教授、石井英真講師（神戸松蔭女子学院大学）

声：「『逆引き設計』論、大変納得しました。単元のゴールで求める姿を明確にし、評価計画を立てる際、永続的理解につながるよう、可能な形でパフォーマンス課題を取り入れながら子どもを正しく見取っていきたい。子どもと一緒に自分自身も力をつけるためのヒントをたくさん頂きました。」

●演習『「カリキュラム設計データベース」の活用』

担当：中池竜一助教、松井保樹講師（京都産業大学附属中学・高等学校）、西岡加名恵准教授

声：「日々追われるような実践の中で忘れていくような課題づくりとループリックをCDDDBにupすることで蓄積でき、また他の人のものも参照できる[のが良い]。』



2. 「学校教育研究フェスタ」

「学校教育研究フェスタ」（以下、「フェスタ」）は、最新の政策動向や研究成果について情報提供を行うとともに、新旧の受講者が一堂に会して交流する機会を提供するものである。2010年度は8月19日に実施し、東は栃木県から西は長崎県まで1都2府12県から、58名の参加があった。

まず、矢野智司教授の講演を行った。

●講演「生命と教育：『逆上がり』から考える」

講師：矢野智司教授

声：「個々の生物によって世界が違う”納得です。人間も一人一人、その人の持つ道具によって世界が違うなと思いました。“発達”と“生成”、両方を人間がもっているということも納得です」、「学校教育の行先が不透明な現在、現場で働く者が、教育哲学のような骨太な理解と考え方を求めている気がしてなりません。来年、……今一度[お話を]お聞きしたいと思います。」



またE. FORUMでは、2009年度より、スタンダードの共同研究開発に取り組んでいる。スタンダードとは、社会的に共通理解された目標＝評価基準のことである。2009年度には会員有志に原稿を依頼し、『「スタンダード作り」基礎資料集』を作成した。次に研究者に資料の検討を依頼し、「フェスタ」において、その内容をご報告いただくシンポジウムを実施した（2010年度は特に、国語、算数・数学、英語の3教科に焦点をあてた）。

このようなスタンダード作りには、重点目標として設定されるべき教科の基礎・基本を共通理解していく上で大きな意義があると考えられる。シンポジウムに対しては、次のような声が寄せられた。

●シンポジウム「スタンダード開発の可能性と課題」

登壇者：西岡加名恵准教授、石井英真講師（神戸松蔭女子学院大学）、八田幸恵講師（福井大学）、赤沢真世准教授（立命館大学）

声：「国家（学習指導要領）と学校現場の間、中間の公共性を持ったスタンダードというのは、とても

現実的な目標だと思いました。本来であれば、教員一人ひとりがそれぞれの内容についての目的を持つべきだと思いますが、それはなかなか難しいので、『中間の公共性』が生きてくると思いました」、「各教科教育の本質に迫るような若手研究者の話は刺激になった。」

最後の実践交流タイムにおいては、参加者の間での交流が行われた。受講者からは、「意見交換や他の人のものを見ることで、理解しにくかった部分が少しずつつながっていくようです。今まで教科書まかせにしていたカリキュラム作成や教材研究を見直すきっかけになりました」といった声が寄せられた。



3. 第6回実践交流会

2011年3月26日には、第6回実践交流会を予定している。実践交流会は当初、「もっと参加者同士で交流する機会がほしい」との受講者の声から始まったものである。

第6回実践交流会では、下記の内容を実施する予定である。

●分科会A：実践交流「教科や総合の指導と評価」

担当：赤沢真世准教授（立命館大学）

●分科会B：実践交流「教員研修と学校経営」

担当：北原琢也教授（京都橘大学）

●分科会C：ワークショップ「ループリック作り体験」

担当：趙卿我助教

●ワークショップ「総合博物館を探究する」

担当：大野照文教授（京都大学総合博物館）

京都大学総合博物館との連携によるワークショップは、新たな試みである。展示の意図を読み取る力量の向上をめざす本研修は、児童・生徒の探究を指導する教員にとって大きな意義を持つものと期待される。

今後もE. FORUMでは、会員の声を活かしつつ、より良い研修の提供と、教育実践に役立つ研究開発に努めていきたいと考えている。

（文責：西岡 加名恵）